

年頭の挨拶

鹿児島県栄養士会 会長 油田 幸子



謹んで初春のお慶びを申し上げます。

皆さま、お揃いで健やかな新年をお迎えのことと存じます。昨年は私どもの活動につきまして、大きなお力添えをいただき、心から、感謝申し上げます。本年もどうぞ宜しくご指導賜りますよう、お願いいたします。

昨年は、天災・地災、そして人災に、日本に限らず世界中がその脅威に晒され、厳しい一年でした。鹿児島県栄養士会も小規模ながら公益社団法人として、社会の変容に即した「県民の皆さまへの食からの支援」を目標に様々な取り組みを実践してまいりました。管理栄養士・栄養士は、一昨年より薬剤師・看護師等と同様に医療職種として明記されるようになりました。栄養士会は6つの領域に分かれて協議会活動をしておりますが、すべて栄養を基礎とした医療職としての活動です。皆さまの近くの管理栄養士・栄養士がさらに大きく育つよう、お声掛けいただければと思います。

この世に生を受けてから終焉まで、どのような場合も食＝栄養の力は欠かせません。人としての尊厳を守る第一は、「お口から食べる」ことから生まれる種々の感性を、維持できることだと思います。

しかしながら、昨年の異常気象は厳しい結果を残しました。農業・漁業・畜産業・天地の異常によって、収穫時期のずれ込みや水分不足による生育不良・味の変化・品質の変化による商品価値の低下など、あらゆるものに影響が生じました。その上、日本人の主食たる米騒動まで…大量調理施設を持つ医療・介

護施設は日々の食材の高騰に、一喜一憂しながら乗り越えてきました。それでも召しあがっていただく方に適切なお食事を決まった時間に提供し、美味しく召しあがっていただくことを、約束事として続けてきました。ここでは初心に帰り、食の大切さを見直すとともに、その他、生きとし生けるものの命をいただいている私たちは、食への感謝の気持ちを忘れてはならないということを再認識させられました。

鹿児島も少子高齢化の避けられない現実のなかで、高齢者の皆さまが自立した日々・また在宅医療を維持継続するために欠かせないもの・できることをご一緒に探すお手伝いの輪を、広げていこうと取り組んでおります。鹿児島は“食の宝庫”，その力をどのように活用すればいいのか・ベストな付き合い方なのか、それぞれの生活パターンに合わせて考え、毎日の健康的な食生活に繋げることでと考えています。

これから求められる在宅医療が負担なく継続できるように、栄養士会会員はサポートをさせていただきます。

2026年、新しい1年がスタートしました。

鹿児島県栄養士会は、県民の皆さまの健康増進のお手伝い組織「県栄養士会栄養ケア・ステーション」の活動を拡大してまいります。これから地域に焦点を当て、誰でもどこからでもSOSの送れるような、開放された栄養ケア・ステーションとして広げていきたいと考えております。管理栄養士の活動は、在宅訪問栄養食事指導はじめ、先生方のご指示をいただかないと動けません。私たちは、フレイ

ル・生活習慣病重症予防・嚥下食実習など、これから迎える避けられない現実への予防対策として、高齢者の皆さまの現実を正しく理解し、それぞれできることを探しに努めていきます。

日々、食形態・栄養学・医療も大きく進展していきます。それでも人の命を守る根源の一角に栄養があることを自覚して、取り組んでいきます。

